陰の傀儡師

流星めぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陰の傀儡師

【Ｎコード】
Ｎ９２９９Ｍ

【作者名】
流星めぐみ

【あらすじ】
小野崎旭人は両親を亡くし、兄の幸人と二人で暮らしていた。しかし旭人が高校を卒業した春、幸人が殺される。それをきっかけに、一人、また一人と犠牲者が増えていく。まるで犯人の見当がつかない殺人現場に残されるのは、ただ一握りの砂。そんな中で、一人の少女が旭人の前に現れる「薄々気づいてるだろうけど、これはただの事件じゃないの。この事件には、いわゆる魔法っていうのが絡んでる」

序：血染めの春

【傀儡師――人形を使って諸国を回った漂泊芸人。又は陰にいて人を操る者。策士。黒幕】

青年は呆然とそこに立ちすくむ事しかできなかった。
周囲は鼻をつくような臭いが漂っているが、さしてそれは気にならなかった。
今の彼には視覚しかない。他の機能は、視覚にすべてその力を奪われているようだ。
彼の目には、その空間だけ、まるで別々の絵をてきとうに貼り付けたような違和感を焼き付けていた。

青年の姿は、高校の卒業式を終え、黒髪を整え胸元に赤いコサージュをつけて、普段はだらしなく着ていた制服も襟元をぴしりとしめている。
頬にはうっすら涙の痕があるが、それが笑い皺の上にできているのが悲しさだけから流したものではないと物語っていた。

彼が今立っている場所は、何も通常と変わらぬいつもと同じ自分達の部屋だった。
中学2年の時両親を事故でなくし、それからは5つ上の兄と二人で過ごしてきた。
一戸建てにはさすがに住めないので、兄がアルバイトをしてマンションを買った。
1LDKのそこは、男2人で住むには十分すぎる広さがある。
それなのに、その空間には絶対にあってはならぬモノが存在していた。
逆に言えば、その空間には絶対になくてはならぬモノが存在して

いなかった。

「兄さん……何、やってるの？」

そう尋ねても決して返事は返ってこない。

その代わりと言ってはなんだが、ピチャリピチャリと、彼の服の裾から赤い液体が滴れ落ちる。

血を流してからそれほど時間がたっていないのか、血は赤く鮮明に床に溜まり場を作っていた。

青年はその血溜まりを一心に見つめながら、恐る恐る兄に近づいた。

そしてソファーに座ったまま静かに目を閉じている兄の横顔に視線を移して、もう一度尋ねる。

「寝てんの？」

そう言って、いつもと変わらない仕草で右肩を叩いた。

しかし青年に叩かれた体は、ユラリとそのまま左に倒れてしまう。

彼の体には、全く芯が通っていなかった。骨や筋肉が、実際持っているはずの機能を停止している。

まさか倒れるとは思っていなかったので、驚いて青年は兄の体をもう一度見渡した。

すると、腹部には血が伝って真っ赤になった、何かの柄がくっついている。

腹部に柄がくっついている時点で、その柄が一体何の柄なのかは想像がつくだろう。

指先に触れた兄の体は、まだ硬直していないものの、人肌とは思えない温度だった。

そしてそこで初めて、青年の体をじわじわと恐怖が襲った。
――兄さんが血を流してる死んでる。兄さんが自殺するわけない。じゃあ何で死んでる。とにかく警察に。でもまだ生きてるかもしれないから救急車も呼ぼう。誰が殺したんだ。誰に殺されたんだ。どこにいる。血が綺麗だから時間もそんなにたってない。近くに、まだこの近くにいるのか。人殺しが近くに。さっきすれ違った何人かの中にいたのかも。どうしよう。怖い。逃げなきゃ。怖い。でも兄さんが。でも怖い。死ぬ。死んじゃう。俺も兄さんみたいに。嫌だ。どうしよう。嫌だ！！

そう思ったとたん、バネのように青年の体がはねた。
そして背後を振り返り、誰かが居るんじゃないかと何度も左右を確認する。
すると、じゃりっと足の裏が何かを踏んだ。

「ひっ」

体を縮こまらせて下を見ると、そこには掻き集めたら両手におさまる程度の砂が、床中に散らばっていた。　それがもし、兄を殺した奴が持ってきた砂だったら。
そう考え始めると、青年の体の震えはとまらず、一目散にマンションを逃げ出した。
エレベータに乗ろうとすると、1階から丁度上ってきた。
しかし青年の頭の中で、もしかしたら人殺しが自分の存在に気づいて殺しにきたのかも、という考えが浮かび、じりじりと後ずさりする。
そしてピンッと7階を示して音が鳴り扉が開いた時には、青年は階段を駆け下りていた。
とにかく逃げて、誰に伝えないと。

兄さんが殺された。俺の、俺の兄さんが、殺された！！

序：雨降り

『今日午前１０時頃、朝ヶ丘高等学校の教師加藤信人（のぶひと）が自宅にて遺体で発見されました。傍には一握り程度の砂が散らばっていた事から、警察はこの事件も例の連続殺人と同じ者の犯行として調査を進めています』

・・・・・・

『しかし近頃は本当に物騒ですよねぇ。警察はまだ犯人のめぼしさえついていないとか』

『そうなんです。現場に落ちている砂が一体どこから持ち出されたものなのか分かれば、調査ももう少しはかどるだろうと考えられていますが……』

『砂の出所が分かったところで、何が変わるんでしょうねぇ』

『それほど、証拠と言う証拠が全くないんです。今回の連続殺人は小野崎幸人（おのざきゆきと）さんを初め、この事件で5回目の犯行となるのですが、指紋や足跡一つ付けず、そして被害者に一切の抵抗をさせずに腹部を一刺しですから』

『本当怖いものですねぇ。皆さんも一人で出歩くのは気をつけましょう』『後、家に居る時も無闇に人を招き入れないよう心がけてください――』

そこまで言って、画面は白い光を放ってから黒色に消えた。

青年――小野崎旭人（あきと）は１ヶ月前にたった一人の兄であった小野崎幸人を亡くし、今は一人でマンションに住んでいる。

進むはずだった大学には通っていない。お金はいつも兄だよりだったのに、その兄が死んだ今自分で稼ぐしかなくなってしまったからだ。そんな少ないお金では、大学に通えるはずもない。

テレビをつけると毎日、連続殺人についてが流れ続けている。

しかしこれといった進展はなく、誰かが殺された、もしくは評論

家達のいわゆる意見交換会というやつばかりが放映されていた。

「ノブチンが……」

朝ヶ丘高等学校は、旭人が通っていた学校だ。その上、加藤信人は高校3年の旭人の担任だった。

無意味に明るくて、良い先生だった。兄の葬式の時も来てくれて、これから大変になるだろうから、といって、泣きながら旭人の手にお金を握らせてくれた。

ほんの3週間前に会ったばかりなのに、なぜその人がテレビの画面で名前を告げられたのだろう。

しかし、不思議と涙は沸いてこなかった。

携帯が鳴り始める。宛先を見ると、同級生の柏木浩史（かしわぎひろし）だった。

きっとテレビか携帯のニュースでも見て、連続殺人に関するメールでも送ってきたのだろう。

旭人はメールを見る気分になれず、そのまま放置した。

人が死ぬ、という事にはどうしても慣れなかった。

しかし、現実感があるわけでもなかった。

ただその事実を突きつけられて、自分だけ夢の中に浮かんでいるような浮遊感を感じるだけだ。

父や母が死んだ時もそうだった。

作られていない朝食、洗われない服、掃除されていない部屋、使われない上着。

いつもと違う事に違和感を得つつも、それを現実に直視しようとしない。

いや、しないのではなく、できないんだ。

携帯の着信音が途絶えた。そして部屋は沈黙と化す。

旭人はただ無心に寝転がり、天井を見上げていた。
それから何分ほどたっただろうか。マンションのチャイムが鳴った。
旧式のぼろいマンションなため、玄関口にしか呼び鈴がない。
旭人は出ようかどうか迷ったが今日は雨であることに気づいた。
「ずっと立たせるのは、人としてどうかしてるかな……」
そんな独り言を呟くと、のろのろ立ち上がった。
そして相手が誰なのかも確認しない上チェーンも掛けず、いきなりドアを開けた。
「あ痛っ！！」
「あ、すみません」
旭人の『はい』という声を呼び鈴に期待していた少女は、急に開いたドアに額をぶつけたようだった。
少女は額を押さえてうずくまると、キッと旭人を睨みつける。
「ちょっと急に開くなんて卑怯じゃない？」
「すみません」
「……あのさ、大丈夫？とか越えかけようって気遣いはないわけ？」
「大丈夫ですか？」
旭人はドアを開きつつ彼女を見下ろし、彼女は額をさすりつつ旭人を見上げた。
お互い口を結んで、どちらかがしゃべるのを待つ。
少女は緑色のチェックのスカートに、緑色の襟に白いラインの入ったセーラーを着こなしていた。
黒い髪は肩まであり、それは変な癖がつくことなくサラリと首元

に落ち着いている。
少し茶色がかった大きな瞳は潤いを保っていて、そこに小さな唇、白い肌がよく似合う。
旭人は、今まで彼女と会った事があるかを必死に探ったが、まるで思い当たる節がなかった。
――兄貴の知り合い、か？
二人の沈黙の中、旭人はそんな事を考えていた。
すると痺れを切らした少女が、むっと頬を膨らませると立ち上がる。
立ち上がった少女は、思った以上に身長が高かった。

「あんた、絶対もてないでしょ」
「2回ぐらいなら告られたことありますよ」
「……あっそ」
「それで、何の用ですか？」

旭人は無駄話をする気分にはなれず、とっとと用件を聞いておっぱらうつもりだった。
もし兄貴に用があるのなら、兄貴は死んだと伝えればいい。
兄貴の葬式にいけなかったことを申し訳ないと思っているなら、別に気にしてないと言えばいい。
マスコミ繋がりなら、一言二言しゃべればいい。
しかし、少女の口から出た言葉は旭人の意に反するものだった。

「んーとりあえず、部屋あがらして」
「……は？」

彼女の言っている事が理解できず、とりあえず聞き返してみた。
しかし少女は有無を言わせぬ態度でずかずかと部屋に乗り込んでくる。

「ちょっおい、待てよ！！」
「何よ」
「誰が、誰が勝手に入って良いって言ったんだ！！」
「え、ダメなの？」
「ダメだろ！！」

すると少女は、体を半分部屋にうめながら、少し考えるそぶりを見せた。
旭人は黙ってそれを見つめる。早く、早く、と促すように。
そんな旭人の視線をものともせず、少女はゆったりと口を開いた。

「あのさー知りたくないの？」
「何を」
「貴方の兄さん、小野崎幸人を殺した犯人」
「そんなの別にどうでもい……」

そこまで言って、ゴクリと息を呑んだ。
今度こそ、今度こそ聞き間違いだろうか。
自分の耳は、おかしくなったようだ。最近耳掃除してないな。耳鼻科に行かないと。
そうだ、今から行こう。さてと、電話で予約してからバスの時刻は……。

「ねえ、旭人君？」
「うわっあの、その……冗談はやめてくれませんか？」
「冗談じゃないし。私はいつでも大真面目だよ。でも、ここで立ち話するんじゃ長くなるから、とりあえず中に入れてくれない？」

旭人は、頭の中を整理する時間が欲しかった。

頭の中は、彼女の言葉が真実なのかどうかという疑問と、犯人が分かるかもという期待と、耳がおかしくなったのかもという不安にさいなまれている。
しかし、少女は待つつもりは全くないらしく、旭人の返事がないのをいいことに、勝手に乗り込んできた。

「おい俺はまだ何も」
「無言も肯定の内」

なんて奴だ。
旭人が思い描いていた事態と全く違う方向に進む出来事に、彼は困惑するしかなかった。
彼女の腕を引っ張るのが先か、いやでもドアを開けっぱなしにするのもあれだし、しかしどうせ彼女を外に出すんだから開けっ放しでもいいような――。
そんな事を考えていると、いつの間にか彼女はテレビ前のソファに悠々と腰掛けていた。
まるで我が物のように、さきほどまで旭人が飲んでいたコーヒーに口をつけ、転がっている携帯に手を伸ばそうとする。
――話をして、それから追い出そう。
結局彼の結論はそう至った。
まさか、これで彼の今後が１８０度も変わってしまうとも知らずに。

序：雨続き

少女がコーヒーを飲んでしまったので、仕方なくもう一杯注ぐことにした。
小野崎旭人は向井側のソファに座り、我が家のようにくつろぐ少女を無言で見つめた。
どうしようもない無言の空間に、旭人はとりあえずコーヒーを飲む。
そしてカタリとコップを置くと、少女のほうをチラリと見上げた。
すると、丁度彼女もこちらを見ていたようで、視線が重なる。
びっくりして、あっと声を漏らすが、少女は射抜こうとするかのようにこちらを一心に見つめていた。

「あの……それで用は？」
「さっきも言ったじゃん。お兄さんのことよ」

旭人はその言葉を聞いて反射的に眉間にしわを寄せた。
一見ただの中学生か高校生にしか見えないこの女が、兄の一体何を知っているのか。
いや、兄というより例の連続殺人とどう関わりがあるのか、という事のほうが気になる。

「知りたくないの、あんた？」

旭人の反応を見て少女は不思議そうにたずねた。
旭人はそんな少女を見て、ズボンを巻き込むように両手に拳を作る。
――知りたいに決まってるだろ。
だが、いきなりやって来たどこの誰だか分からないような人に、兄のことを聞くのは癪に障った。
何か負けてしまったような気がする。

旭人は、少女の視線に負けないように睨み返すと、ゆっくり口を開いた。

「もちろん、知りたい。でもまず、俺は貴女がどこの誰で、兄とどういう関わりがあったのかが知りたい。そうでないと、貴女のいうことは信用できませんから」

「ああ、そういう事ね。言い草がちょっとムカつくけど、あんたの言い分にも一理あるかな。私は白柳真亜叉、魔法人形遣いよ」

少女――白柳真亜叉（しろやなぎまあしゃ）――は、そう言って微笑んだ。

旭人は、彼女の言葉を軽く流すところだったが、最後の言葉に固まる。

――魔法、だあ？馬鹿だろ、こいつ。どこの絵本から飛び出してきやがった。

白雪姫か、人魚姫か、それともシンデレラか？？

「あの、真亜叉さん、俺冗談に付き合ってる暇ないんで」

「冗談？　誰が冗談なんていったのよ」

旭人は、彼女の茶色い目を改めて真剣に見つめ返してみた。

それに応えるように、彼女の瞳は揺るがない。

言葉のない、目と目だけの会話の中で、真亜叉は嘘をついていなかった。

しかし、だからと言って魔法とやらを信じるか否かは話が別だ。

それより何より、なぜそこに小野崎幸人の名がでてくる？

「仮に、もし仮に魔法が存在してたとして、それが何か兄と関係あるのか？」

「大有りよ！！」

途端に真亜又は立ち上がった。
がたりと机が揺れて、空のコーヒーカップが倒れはしないものの
グラグラと回る。
そして顔を近づけてくると、額にシワを寄せて唸るように言った。

「最近じゃ知ってる人も少なくなってきちゃったけど、確かに魔法は存在するの。お偉いさんなら皆知ってるし、不可解な事件の真相に深く関わっている場合もある」
「それは――」

旭人は、明らかに信じられないといった感じで目を見開いた。
ごくりと重たい音と共に、のど仏が上下する。
それを見た真亜又は満足げに笑って見せた。

「そう、今回の事件は正にそれ。警視庁は私達魔法人に調査を求めてきてる。テレビでは中継されないけれど、すでに魔法人による調査で分かった事もいくつかあるわ」

そう言った真亜又は、カップを覗き込み、中身がない事に気づきぶすっとふてくされた。
旭人がその言葉に悩んでいることなどお構いなし。
旭人に、もう一杯ほしいとカップを差し出す。
旭人といえば、頭が正常に働かないのかそのカップを流れのまま受け取り立ち上がった。
そして台所でココアの粉をかき混ぜながらぼんやりと考える。
――さあ、どうしようか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9299m/

陰の傀儡師

2011年1月13日00時44分発行